

温かい学級づくりのために

～具体的な学級活動の研究と生徒の変容について～

芸西村立芸西中学校 教諭 矢部真矢

1 はじめに

本校は県東部に位置する生徒数 110 名程度の小規模校である。穏やかな学校風土で、生徒一人ひとりはとても素直で学校生活にも真面目に取り組める落ち着いた生徒が多いが、友だちとのかかわりが苦手で人間関係で苦戦している生徒も少なくない。また、小規模校にしては不登校・別室登校生徒数が全体の一割弱を占めており、危機感を感じていた。一昨年度までは、学年団を中心に生徒支援を行っており、学年によって支援方法は様々で他学年との温度差もあった。また、それぞれの教員が自分の経験と判断で支援を行っており、個別の生徒に対する支援の方向性が教員によって異なっていたことが課題であると考えた。生徒が安心して学校生活を送ることをテーマに、まずは校内支援体制を整えていこうと、昨年度より高知県心の教育センターの「温かい学級づくり応援事業」の研究指定を受け、今年で2年目を迎える。

2 研究の目的

- (1) 一次的・二次的支援生徒の自尊感情を高めるための具体的な学級活動の研究
- (2) 中1ギャップの解消を目指し、学級の中で苦戦している生徒たちの支援体制づくり

3 研究の内容と方法

- (1) 平成 22 年度の研究内容と到達点（成果）

まず最初に行ったことは校内支援体制づくりである。個々の生徒について、支援方法、具体的な取組を考えていく「生徒支援委員会」を発足させた。構成メンバーは校長、教頭、養護教諭、スクールカウンセラーと研究員の5名で、隔週金曜日に定例会を行い、Q-U やチェックリストを活用し、各学年団から報告のあった気になる生徒について、チーム支援体制が必要か否かの決定とともに、具体的な支援の方向性を決めた。定例会以外に会を持つことが多く、気になることがあればその学年団とすぐに会を持ち、支援についての進捗状況などを確認した。これにより、三次的支援生徒に対しての校内支援体制が確立し、支援の方向性が一本化したことが大きな成果である。それにより、不登校生徒の出席日数も前年度に比べ増えてきた。

また、もう一つの大きな成果は、教職員の校内支援体制への意識が高まったことである。一昨年度までは学年団だけで動くことが多く、他学年の動きがあまり見えず、学年を越えた生徒との交流もなかった。職員会でも生徒支援についても報告のみで、詳しい生徒の状況について活発な意見が出ることもなかった。しかし、昨年度は職員会でも紙面での報告

や、学年を越えての情報交換ができるようになり、空き時間を割いて別室登校生徒への学習支援をする等、積極的に生徒とかかわろうとする教員の姿が見えた。全教職員の協力体制の高まりが今年度へつながっている。

表 1 チーム支援例

<p>チーム支援例 ① Aさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎朝の電話・副担任A ・家庭訪問・養護教諭、担任 ・保護者対応・担任 ・登校した時の窓口・養護教諭 ・登校した時の対応・支援員、担任、副担任A・B 	<p>チーム支援例 ② Bさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭訪問・副担任A ・保護者対応・担任 ・母親との関係づくり・支援員、副担任A ・登校した時の窓口・副担任A ・学力支援・支援員、副担任A・B
--	--

(2) 平成 23 年度の研究内容

ア 学級の様子

全体的に見ると元気なクラスであり、男子がとても活発で何に対してもよく反応する。しかしその反面、女子の表情が硬く前に出る生徒がおらず、仲間関係もあまり良くないと感じられた。また小学校時には不登校・別室登校の生徒が2名おり、その他にもこれから不登校が心配される生徒が特に女子の中に何人か見られた。学級担任としてとにかく不登校を出さないことを第一目標とし、学級活動を行うことを決めた。また学習で苦戦している生徒や特別な支援の必要な生徒も多数見受けられたので、まずはチェックリストとQ-Uを活用し、学年団の教員による観察、面談を多く行い、気になる生徒の情報収集を行った。

イ 具体的な学級活動と人間関係づくり

「当たり前のことを当たり前でできる学級」を目指し、日々の何気ないことを一番大切に指導している。整理整頓、係活動等全員でしっかりと責任を持ってやるという意識をはぐくむことを大切にしている。また、日常における課題や提案について、生徒の意見を取り上げ、自分たちで考えさせることにも重点を置いている。学級で問題が起こったら、答えが出るまで、生徒から出てきた意見を全体へ投げかけ、何度も何度も考えさせている。またしっかりとルールづくりをする一方で、野外炊飯やどろんこ遊びなどの自然体験学習を取り入れ元気いっぱい楽しく活動させることも大切にしている。その時の学級の状態を把握し、その場に応じた学級活動をすることを心がけた。

表 2 具体的な学級活動

<p>自己スピーチ</p>	<p>毎日、朝学活時に1人ずつ行う。自己紹介を中心に前に立って自分について語る。自己開示を目的としているが、最近はワンパターンとなっているので、内容を充実させたいと考えている。</p>
---------------	--

新聞記事発表	毎日、終学活時に新聞係が行う。自分の気になる記事について紹介し、自分の意見を述べる。年度当初に比べコメントが次第に良くなっており、クラス全体の興味を持って聞こうとする雰囲気も出てきた。
構成的グループ エンカウンター① 「無人島に何を持 っていく？」(4月)	中学校に入学して間もないころ、クラスの雰囲気が固いように感じたので、班替えをした後、関係づくりをするために副担任が行った。班内での活発な意見交換ができ、クラス全体での発表の場面でも自分たちの班の意見をしっかりと見え、それに対するコメントも言うことができた。
スクールカウンセ ラーによる授業 (5月)	元気が落ち着きがなく、少し暴言のある生徒もいたため、「話を聴く」をテーマに授業を行った。スクールカウンセラーの話に集中して耳を傾けていた。
どろんこ遊び (6月)	田植えをする前の田んぼでどろんこ遊びを行った。みんなで田んぼの中にダイブしたり、板を敷き自転車でもどこまで行けるかを競争したりして、思いっきり楽しく遊ばせた。
心の冒険教育 (6月)	大栃中より矢田先生を講師に招き、自分たちのクラス目標に近付くために自分たちがどのようにすればいいのか、1年後の自分たちを想像した学習を行った。
野外炊飯 (6月)	地域にある川に行き、川で遊んだり、レクリエーションをしたり、野外炊飯を行った。500円を渡し、その予算内で自分たちでメニューを決め、実際にスーパーに買い物に行かせた。班全員で知恵を出し合い、各班がそれぞれの野外炊飯を楽しんだ。
構成的グループ エンカウンター② 「気になる自画像」 (6月)	班内で、友だちのいいところを探し、友だちに伝える活動を行った。自分が周りからどのように見られているか肯定的な意見をもらうことで自尊感情を高めることも意識した。
学級レクリエーシ ョン 教育実習生のお別 れ会(6月)	教育実習生のために、「お別れお楽しみ会」を計画した。体育館を使い、球技やゲームをして楽しんだ。司会からルール決めまで、すべて生徒が企画・運営を行った。
構成的グループ エンカウンター③ 「友だちのいいと ころさがし」(9月)	体育大会の取組中に事前に用紙を配付しておき、取組をする中で友だちのいいところやがんばっているところを書かせるようにした。このような活動は初めてだったらしく、生徒全員がとても喜んだ。
学級レクリエーシ ョン (1月)	学級の雰囲気を和らげるために、学級レクを行った。前回同様自分たちで企画・運営させた。前回に比べ、レク班を中心に教師の力をあまり借りることなく活動できた。

ウ 授業づくり

本校は協同的な学びを取り入れて今年で2年目となる。しかし、どのような授業づくりをしたらよいのかということが昨年度からの課題であり、それぞれの教員がその答えを探しながら授業を行っている。しかし、今年度は生活班を6人編成から4人編成にし、授業内でできるだけグループ活動を取り入れることを全教員の共通認識とし、それぞれが学び合いや仲間づくりを第一とした授業づくりを目指している。

そして、学力向上・授業改善部と連動し、月に一度全教員が研究授業を行うこととした。初めは協同的な学びという視点での研究協議であったが、次第に三次的な支援が必要な生徒や特別支援教育的な配慮を要する生徒へどのような授業を行ったらよいかという視点でも協議をするようになり、教師の授業づくりに対する見方が変化してきた。

エ 校内研修の充実

昨年度に引き続き、石隈利紀教授（筑波大学）と家近早苗准教授（聖徳大学）からスーパーバイズを受けた。夏休みに1日研修日を設け、各学年の生徒支援委員会を行い、各生徒へのチーム支援の在り方について助言をいただいた。

また、毎月の研究授業の中で発達障害などの生徒に対する支援の仕方や授業づくりについての協議が活発に行われるようになり、さらに発達障害について研修したいという声が教員からあがり、是永かな子准教授（高知大学）を招き、「発達障害等の幼児・児童・生徒の健全な育ちを保証するために」という題目で講演をいただいた。そして、3学期には、「発達障害等のある生徒の特性に応じた支援や分かりやすい授業づくり」と題し、1年生で特活の研究授業を行い、授業構成や教師の発問の仕方、生徒の様子について多くの助言をいただいた。それを全体で再度研修し直し、それぞれの授業づくりに生かすことを確認した。

オ 保護者への連絡や関係機関との連携

この学年は入学当初より、家庭背景や人間関係、学力、特別支援にかかわること等、様々な背景の生徒が多く在籍していた。学年団を中心にまずはチェックリストを活用し、10名の生徒についてチェックを行い、個別の支援が必要な生徒を確認した。また、Q-Uから見えてくる学級の中でしんどさを抱えている生徒についても確認し、両方の重なる生徒を早期に見つけ、担任だけでなく副担任とも協力をして面談を行ってきた。その中で個別支援が必要ではないかと考えられる生徒についてはすぐに生徒支援委員会を開き、それぞれの生徒に対してどのような支援体制を取っていくのかを決めた。また、何度も生徒支援委員会を行い、進捗状況の把握も行った。特に発達障害等が疑われる生徒に関しては巡回相談を行い、早期に保護者に連絡し、教育相談につなげていった。これは保護者との連絡を密に取り関係をつくった担任の成果だと考える。また支援員は担当する生徒の学習のつまづきや授業態度について記録を取り、その資料は保護者に教育相談をすすめる際に活用した。

カ チーム支援体制と生徒の変容

現在1年生の中で三次的支援の必要な生徒は10名いる。家庭背景や学習面、特別支援教育的な配慮を要する生徒等、様々な問題を抱えながら学校に通っている生徒に対して、それぞれに応じた支援体制をとっている。その結果、小学校時には不登校・別室登校だった生徒もそれぞれ自分の居場所を見つけて明るく生活をしており、トラブルが多く落ち着きがなかった生徒も個別指導をする中で、学習に集中して取り組めるようになった。1学期は三次的支援の必要だった生徒も二次的支援のレベルになるなど、生徒たちの変容に合わせて校内支援体制の見直しを生徒支援委員会で定期的に行った。生徒一人ひとりに合った細やかな支援が不登校・別室登校を未然に防いでいるのではないかと考える。

表3 具体的なチーム支援体制

<p>チーム支援例 ① Aさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者対応・担任 ・個別指導・担任 ・相談活動・副担任、養護教諭 ・声かけ・学年団を中心に全教職員 	<p>チーム支援例 ② Bさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者対応・担任 ・部活動での声かけ・顧問 ・声かけ・学年団を中心に全教職員
<p>チーム支援例 ③ Cさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者・関係機関対応・担任 ・個別指導・担任 ・相談活動・副担任 ・1、2時間目の自立活動・情緒学級担任 ・声かけ・学年団を中心に全教職員 	<p>チーム支援例 ④ Dさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者・関係機関対応・担任 ・学習支援（英数）・教員による個別指導 ・学習支援（国理社）・支援員によるTTでの学習支援

キ 生徒支援委員会と校内支援体制

昨年度同様、校長、教頭、養護教諭を中心に会を組織した。各学年団から要望がある度に随時生徒支援委員会を開き、何度も生徒の状況確認を行った。生徒支援委員会で確認されたことは職員会で全教職員が共通理解を図り、支援の方向性の一本化を図った。昨年度までは不登校生徒に対する校内支援体制づくりについて話し合うことがほとんどであったが、今年度は生徒支援、学力支援、発達障害等の支援など、様々なことについてその時の学年団のニーズに合わせて会を開くことができ、一歩前進した。また生徒支援委員会で話された内容については口頭だけではなく全体へは紙面での報告・提案とし、全教職員に分かりやすく提示した。

4 成果と課題

(1) 成果

今年度の大きな成果は、学級の中で苦戦している生徒たちに焦点を当てた支援ができたことだ。年度当初様々な問題を抱えた生徒が多く、不登校が心配されていた。しかし、それぞれの援助ニーズに合わせた校内支援体制を整えることで、個々の生徒の困り感を緩和

することができ、今年度新たな不登校生徒はいない。何度も生徒支援委員会を重ね、早期発見・早期対応してきた学年団の生徒に対する誠実さと生徒一人ひとりを大切にしてきた気持ちが、学級全体の生徒たちを温かく包んだのだと思う。

表 4 不登校生徒数と不登校出現率

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度 (平成 23 年 12 月末現在)
不登校生徒数 (人)	8	7	4
不登校出現率 (%)	6.40	6.31	3.60

二つ目の成果として、校内支援体制に対する教職員の意識の向上があげられる。今年度は異動により半数の教職員が替わり、昨年度の取組を引き続き行うことができるのかどうか不安もあったが、残された教職員が昨年度の取組を広げ、新しい教職員と昨年度以上の生徒支援体制をつくることができた。学習支援を要する生徒が多く、個別指導やチームティーチングを行ったり、複雑な学習支援についての校内体制をしっかりと生徒支援委員会で整え、教職員全体で当たった。また、研究授業での協議では特別支援教育の視点から生徒支援を考えたり、Q-U と実力テストの結果を照らし合わせてみたり、職員会でもそれぞれの教員が様々な視点から生徒理解を深めようとする姿が見られるようになった。

(2) 課題

特別支援教育の視点を取り入れた生徒支援ができるようになったことが成果としてあげられるが、一方、課題も明確となった。個別支援の教育環境は整ったが、それぞれの発達障害等に合わせた支援・指導方法が手探りの状態で授業を進めていることだ。発達障害等のある生徒の特性に応じた支援の在り方や、それらの生徒が授業に参加しやすいユニバーサルデザインの授業づくりの研究を深めていく必要がある。来年度は、発達障害などについての定期的な事例研を行う計画をしている。そして、今年度も三次的支援が中心になってしまったが、やはり学級集団を高める一次、二次的支援等の学級活動の充実を図る研究も進めていきたい。